

< 2019年 12月 >

古賀 順子

「ルーヴル美術館  
『レオナルド・ダ・ヴィンチ展』」

パリは「年金改正法」反対ストライキで交通機関が完全に麻痺状態である。12月5日からフランス全土で始まったストは今日で9日目。エドワール・フィリップ首相が段階的な移行を強調した緩和策を発表したが労働組合は納得せず、クリスマス、年末年始を含め、無期限のスト続行を表明している。公共交通機関のみならず学校や病院などにも波及し、市民の足は奪われ、日常生活に影響し、一体いつまで続くのか深刻な問題だ。

長期ストライキを覚悟して自転車移動を試したが危ない。メトロもバスもほとんどなく、道路は車で大渋滞している。自動車、バイク、自転車、トロチネット、歩行者が無秩序に通行していて危ない光景が絶えない。交差点は信号を守らない車、強引な二輪、逆走する自転車、飛び出す歩行者で怖い。結局、一番安全で確実なのが徒歩、毎日1万歩以上は軽く歩いている。

ストライキの影響で、コンサート、オペラ、演劇、バレエもキャンセルが続いている。5日シャンゼリゼ劇場オペラ「フィガロの結婚」、12日パリ・オペラ座バレエ「ル・パルク」・・・何ヶ月も前から予約していたのに残念だが、諦めるしかない。クリスマス商戦真っ只中のパリで、ブティックに客が入らず、エッフェル塔は職員不足で特別閉館、観光客も足がなく動けず・・・本当に困ったことである。

ルーヴル美術館が何年もかけて準備してきた特別展『レオナルド・ダ・ヴィンチ展』(10月24日から来年2月24日まで)も、日によっては職員不足のため閉館、予約した日が開いているか心配だった。ピラミッドの入り口に列はなく、閉まっていると思ったくらいだ。ゆっくり見れるのは有難いが、開催期間中ほぼ予約で一杯の展覧会であるのに人がいなくて残念でもある。レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452-1519)の生涯と作品が年代順に展示されている。ダ・ヴィンチはフィレンツェで彫刻家アンドレア・デル・ヴェロッキオ(1435頃

・1488)の工房で絵画を学ぶ。ヴェロッキオの「キリストと聖トマ」(ブロンズ製レリーフ像)は、ダ・ヴィンチ生涯のテーマ「光と影の効果」を暗示している。フィレンツェ、ミラノ、ヴァチカン、ニューヨーク、シアトル、ロンドン、ウインザー、サン・ペテルスブルグ、モスクワなどから作品が集められ、通常フランスでは見れないものが多い。中でも今回初めて展示された個人像「聖母子」は興味深い。

ルーヴル美術館には「C2RMF (Centre de Recherche et Restauration des Musées de France)」(フランス美術館修復・研究センター)という機関があり、名前の通り、美術品の修復、鑑定、研究活動を行っている。そこに個人像の絵が持ち込まれ、修復が行われた。修復の過程でこの絵がダ・ヴィンチの作品であるかの検証も行われた。1501年から1510年頃に描かれたと思われる板絵で、のちに布地に移し取る修復が行われていた。「糸繰り棒の聖母」と呼ばれる作品で、幼な子イエス・キリストが十字形の毛糸編み棒を持っている。100%正真正銘のダ・ヴィンチ作と鑑定することは難しく、エジンバラにある同じ題名の作品と比較検討された。「岩窟の聖母」の例にも見られるように、ダ・ヴィンチは同じ作品を何枚か描いており、何度も何度も修正し、なかなか完成しない。修復研究センターでは、赤外線、X線などを使った作品撮影が行われ、「糸繰り棒の聖母」の下絵を見て、推考のあとを認めた。また、2作品の背景が比較された。個人像の背景には、ダ・ヴィンチ特有の空の青、山の青、川の水の青が描かれている。何層にも塗られた透明なニス「スフマート」として、繊細な奥行きを深さを可能にしている。聖母が被ったヴェールの透け感は、「モナリザ」のヴェールを思わせる。絵具の分析も行われた。しかし、絶対に間違いなくダ・ヴィンチ作と断言できないのだろう、「ダ・ヴィンチとその工房」との鑑定が付いている。

没後500年経った今日もなお、レオナルド・ダ・ヴィンチの生涯と作品は世界中の人を魅了する。フランソワ1世の時から「モナリザを持つ者がフランスを治める」と云わるように、不思議な力を持つ作品がこの世には存在するように思う。